

作者であることのオートポイエーシス

森田 亜紀

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2011年10月1日 受理)

はじめに

作者であるということは、どういうことなのか。ロラン・バルトによって死を宣告された「作者」とは、作品についての最高権威 (authority)、すなわち作品を全面的に制御し支配することのできる作者 (Author) であった¹⁾。死の宣告の後、美学が問題とする「作者」は、生身の作者ではなく「作品に内在する作者」、作品を通じて受容者に現れる作者である²⁾。しかし現実にも今、多くの人々が「作者」として「作品」を制作している。この人々は、Authorとしての作者でもなく、作品に内在する作者でもない。現実にも「作者」とあるということは、どういうことなのか。われわれは、Authorとしての作者と作品に内在する作者とのあいだ、現実にも生身で制作する作者を問題にしなければならない。

もちろん、作者が作者であるについては、社会的文化的歴史的な文脈が前提される。作者を作者とみなし存在させる枠組みがあり、これを無視することはできない。しかし本論ではそのような、作者を外から囲む文脈をいったん脇に置き、まずは、ひとが実在物を制作してそれを自分に属する自分の作品とみなし、自分を作者とする過程を、内側から考察していく。

1. 制作過程の中動態

作品の制作過程を制作者が語る際、インド＝ヨーロッパ系言語では、しばしば中動態が使用される。内側から体験される制作過程は、「je fais X (私が X をつくる)」というような自分を主語にした能動態の言い回しよりも、「X se fait (X ができる)」「je me fais ~ (私が ~ なる)」というような中動態の言い回しで語られることが多い。制作者に中動態を使いたいと思わせる特徴が、制作体験にはあると考えられる³⁾。

能動態は、主語が過程の外部から過程を引き起こす。主語は過程から影響を受けず、変化しない。受動態は能動態の逆で、外部にある何か (能動態の主語にあたる) によって過程が引き起こされ、(受動態の) 主語が一方的に影響を受け変化する。これに対して中動態では、過程の外部にそれを引き起こす何かがない。主語は過程の座であり、過程に巻き込まれ、過程の内部でみずから変化する。中動態の主語は、能動態の主語のような超然とした全き不変の1ではなく、再帰態のように自分自身を対象とする2分割の1でもなく、過程内部でそれ自身からずれていく1、差異化を含む1である⁴⁾。

作品制作は制作者にとって、能動でも受動でもない中動の出来事として体験される。私が作品をつくる（作品が私によってつくられる）とは言ってしまえない。制作のただなかにおいて、私は外部から超越的に過程を支配し制御する能動的な主体ではない。だからといって私は、他から操作されて受動的に作品を作らされるのでもない。他でもない私の行為から、作品はできてくる。できた作品は私の作品であり、できあがってみれば私が作品をつくったということになる。

このような制作過程は、身体を備えた制作者と素材（より広くは環境）とのあいだの相互限定によって成立する技術、「行為のかたちとしての技術」に視点をおいて理解することができる⁵⁾。制作において制作者は、制作過程に巻き込まれつつみずからも変化する中動態の主語である。制作者が身体を通じて素材と関わるなかで、行為のかたちとして技術が成立し、何がどのようにできるかが見いだされ実現されていく。技術は目的に対する単なる手段ではなく、意図や目的をも含んでかたちづくられる⁶⁾。制作者は、あらかじめ何をどのようにしてつくるかわかっているわけではない。しかしそれができあがったときには、「私がつくりたかったのはこれだったのだ」と思える。制作者は制作を通じてつくるべきものがわかりそれをつくれるようになっていくのであり、事後的に「私がこれをつくった」「これは私の作品だ」と言うことになる⁷⁾。

このような制作過程を中動態で捉えようとする場合、はっきりしない点が残る。「作品ができた」というような中動態の言い回しは、なぜ事後的に「私が作品をつくった」というように能動態で言い換え可能なのだろうか。できあがった作品を、制作者はなぜ自分のつくった自分の作品として引き受けることができるのだろうか。もちろん現実には、できてしまったものを制作者が却下破棄する場合もある。自分の作品として引き受けられないわけだ。とすれば、制作のただなかにおいて自分が過程を能動的に支配しているのでもないにしても、事後的に自分に属さないこと（たとえば偶然）と、自分に属することと、2通りが区別されるように思われる。その区別は何に基くのか。

別の角度から言うとそれは、中動態の過程における差異化を含む1、それ自身からずれていく1が、どのようにして1でありつづけるのか、という問題でもある。変化しても別の存在になるのではなく同じでありつづける「同じ」とは、どういうことか。差異化をとりとめる1、過程に巻き込まれて変化しながらも存続する1があるからこそ、その1が事後的に能動の主語となりうる。逆からいえば、差異や変化のなかには、1に回収されず外部に破棄されるものもありうるということでもあるだろう。この1は、どのようにしてあるのだろうか。

2. 事後性と遡行

ここには時間に関わっている。事後性の問題である。しばしば指摘されるように、制作しようとする者は、何をどのようにつくればいいのか、制作に先立ってはっきりとはわかっ

ていない⁸⁾。表現以前に表現されるものはない、というような言われ方もする⁹⁾。しかしこれもしばしば指摘されるように、作品ができあがったとき、制作者は、「自分がつくりたかったのはこれだったのだ」と思う。これは、制作完了後、事後的に、時を遡って生じる判断である。あとからふりかえてみれば、制作以前に何もなかったわけではない。何かがあった。したがって他方、自分のしたかったことを発見するために制作する、制作によって自分を知る、とも言われる¹⁰⁾。このあらかじめの何かを、あらかじめの時点で語ろうとすれば、「わかっていたのだ、ということになるものの芽生え germination de ce qui *va avoir été compris*」(メルロ＝ポンティ、強調は引用者)¹¹⁾というような、「未来における過去」という複雑な時制が必要になる。

ベルグソンによれば、この種の時間を遡る判断は「回顧的錯覚」である¹²⁾。それは実現した現在を過去に投影することではしかない。或る時点で実現したことがらが、それ以前に可能性として実在したとすることは、現在が過去によって決定されるということであって、予見不可能な新しいものが刻一刻生まれてくる「創造的進化」を考えるベルグソンには認められないことである。悟性は、創造的進化の純粹持続を分解固定し、固定的で不変なものとの関係に再構成して取り逃がしてしまう。固定不可能な変化それ自体を守るために、ベルグソンは事後からの遡行を「錯覚」と否定するのである。ここでは、変化が全面に押し出され、変化を通じて同じであること、同じである1は退けられるように思われる。

これに対しメルロ＝ポンティは、ベルグソンを意識しつつ、この遡行に或る根源的な事態を見る¹³⁾。或る時点で成立した判断は、自ら過去に遡って行く。現在が過去をつくる。そしてその過去は過去にとっての未来である現在を準備することになるものだった。表現以前に表現されるものはないが、表現は表現によって表現されることになるものを表現することだった。ここには時間のもつれを含んだ循環がある。メルロ＝ポンティはこの事態をそのまま受け入れる。ベルグソンが絶えざる変化を重視して、同じでありつづけるものを退けるかとも見えるのに対し、メルロ＝ポンティは変化するということと、同じであるということとを、同じ重さで積極的に肯定する。彼はむしろ両者が同時に成立していることから、大文字の「存在」を考えようとしていた¹⁴⁾。

時間を巻き込む循環は、それ自身からずれていく1の「1であること」と関わる。しかしそれはどういうことか。その手前を考えなければならない。

3. オートポイエーシスの理論

作者の作者であることを考えるには、中動態の、それ自身からずれていく1の「1であること」、変化を通じて同じであることの「同じ」を考えなければならない。その際、オートポイエーシスの理論が新しい視野を開いてくれる。

オートポイエーシスとは、生命システムの考察から提起された概念である。システムは、関係し合う要素の集合であり、要素間の制約し合う関係性から統一的全体を構成して

いる¹⁵⁾。生命もシステムであるが、他のシステムと異なり、自分で自分を維持し再生産する¹⁶⁾。このような生命システムを説明するために、マトゥラーナとヴァレラは、反復的に自己を産出しながら作動するシステム一般のなりたつしくみを「オートポイエーシス (= オートポイエーシス 自己-制作) autopoiesis」という語で概念化した¹⁷⁾。

オートポイエーシスは、マトゥラーナとヴァレラが最初に定義して以来、よりの確な定義を求めて幾人かの論者によって再定義されているが、ここでは最もシンプルな山下和也のものを引用する。

オートポイエーシス・システムとは、産出物による作動基礎づけ関係によって連鎖する産出プロセスのネットワーク状連鎖の自己完結的な閉域である。閉域形成に参加する産出物を構成素と呼ぶ。¹⁸⁾

或るものが次の何かを産出するプロセスを作動させる。そのプロセスから産出されたものが、次の産出プロセスを作動させる。そのプロセスから産出されたものが、その次の産出プロセスを作動させる…。そのようにプロセスが連鎖し、或る時点での産出プロセスが、連鎖の最初の或るものを産出したとき、プロセスの連鎖は、ひとつの閉じた環を形成する。いったん連鎖の環が閉じると、産出プロセスはどこかで元のところに戻り、そこからまた同じようにつぎつぎと連鎖的に作動をつづける。この作動連鎖はそれ自身で、ぐるぐるまわっていくはずだ。産出プロセスの連鎖はひとつの閉じたシステムをなし、システムの産出物がシステムそのものを作動させるということになる。システムを作動させる産出物はシステムの「構成素 component」と呼ばれる。みずから産出した構成素によって作動するのだから、システムは自己完結的に、みずから作動をつづける。これがオートポイエーシス・システムと呼ばれるものである。

われわれはここに、個の成立を見ることができる。オートポイエーシスは個体化の理論である。システム作動の自己完結が、システムを個として存在させる。システムは、それ自身で作動することによって、他とは絶対的に区別された個として存在する（「個性性」）。この個は、それ以上分割不可能な単位体である。環境も、システムの側から境界づけられる。すなわちプロセス連鎖が環状に作動するとき、内と外との区別が生じ、プロセスの環状連鎖であるシステム自身と、環の外の環境とが、境界づけられるのである。この境界づけはシステムの作動によってシステムの側からおこなわれ、システムそれ自身と、システムの環境とが、区切られて同時に成立する（「境界の自己決定」）。したがって、すでにある環境の中にシステムが出現するのではない。だからといって未分化の全体に何かの力がはたらき、それによってシステムと環境とが対称的に分化してくるのでもない¹⁹⁾。オートポイエーシス・システムは、外的な何かによって存在するのではなく、それ自身の作動によって存在する。システムと環境との区別は、システムの側から非対称的に行われるのである。

オートポイエーシス・システムの個は、作動しつづけることによつてのみ同一の個である。いかえると、システムを作動させつづける産出物 (= 構成素) が変化していても、構成素を産出するプロセスのどれかあるいはすべてが変わっていても、作動が環状に途切れずつづく限り、そのシステムは、原理上、同じ個体だということになる²⁰⁾。われわれはここに、同じであること (1 であること) と変化・差異化することとを、同時になりたさせる原理を見ることができる。

オートポイエーシス・システムの特徴は、上記の「個性」「境界の自己決定」と並んで「自律性」「入力と出力の不在」が挙げられ、計4点が指摘されている²¹⁾。あとの2点については様々な議論があるが、われわれの問題とする「変化・差異化」と関係してくるため、ここではオートポイエーシスではないシステムとの比較で要点だけ把握しておく。マトゥラーナとヴァレラは、オートポイエーシスではないシステムに「アロポイエーシス (他者^{アロ} - 制作) allopoiesis」という語を用いる²²⁾。例えば自動車は、アロポイエーシス・システムである。自動車は、他の誰かによつて製造され、外部から操縦されなければ作動しない。作動の仕方でも外部から指示決定される。これに対してオートポイエーシス・システムは、みずから作動することによつて存在し、作動を決定するのもシステム自身である。これが自律性である。また自動車は、操縦という外部からの入力によつて走行を出力する。これに対してオートポイエーシス・システムは、外部から作動を指示決定されないという意味で入力がなく、産出するのが自分自身の構成素 (= システムを作動させつづける産出物) という意味で出力もない。われわれの土俵に引き寄せれば、オートポイエーシスは中動態で作動し、アロポイエーシスは (外部の能動を前提とした) 受動態で作動するといえるだろう。

自律的であり、入力も出力もないのであるが、システムは環境と関わる。環境はシステムに浸透する、あるいはシステムは環境を巻き込んで作動する、と言われ、両者の関係には「浸透 penetration」という語が当てられる²³⁾。すなわち、例えばシステムは構成素を産出するが、そのためにはもとなる別の物質が必要であり、それは環境に属するものである。環境の一部である何らかの物質を構成素に変化させることが、システムの作動である。環境は、このようにシステムの作動に組み込まれている。それが浸透である。浸透が入力とみなされないのは、システムの作動を決定するものではないからである。浸透によつてシステムと環境のあいだにありうるのは、決定性のない影響関係だけである²⁴⁾。浸透によつてシステムと環境の双方に生じる変化は、「攪乱 perturbation」と呼ばれる。作動するシステムは、攪乱を通じて変化し、差異化していく²⁵⁾。もちろん、システムが攪乱されるだけでなく、破壊されるような影響関係もありうる。ただし攪乱がどのように起こるか、外部の何かではなく、作動のなかでシステム自身が決定している。影響に決定性はなく、システムは自律的である。変化・差異化はあくまでシステム自身の作動から生じる。われわれはここにも、中動態を見ることができる。オートポイエーシス・システムは作動しな

がら変化し、この変化はおのずからの変化なのである。

4. 作動による存在、自己であることの事後性

われわれは、オートポイエーシスの理論に、「同じ1であること」と「変化・差異化すること」とが、いかにして同時に可能かの、原理を見ることができる。オートポイエーシス・システムは、環状に作動しつづけることによって同一の個として存在し、作動しながら変化する。

われわれはここに、先に述べた事後性を考える手掛かりも見いだすことができる。オートポイエーシス・システムにおいて、システムは構成素を産出するが、産出されたものが構成素とされるのは、それがその後の産出プロセスを作動させるからである。したがって、システムの構成素は、それによって次の産出プロセスが作動した後にしか、定まらない²⁶⁾。構成素だけではない。システムには環境からの攪乱も生じうるのだから、何が構成素となって次にどういう産出プロセスが作動するのも、あらかじめ決まっているわけではない。作動がつづくことから遡って、構成素も産出プロセスのあり方も、それと確定するのである。そのときどきのシステムの状態は、そこに何が属しどのようなにたらくのか、事後的にしか確定しない。

ここに見て取られる事後性は、オートポイエーシス・システムの個体としての存在が作動の継続によって成立していることに基く。作動しつづけること抜きに、システムの存在はない。システムは、みずから循環的に作動しつづけることによって個体として在るのであって、あらかじめ与えられるようにして在るのではない。したがって、あらかじめ定まった構成素や産出プロセスはない。構成素や産出プロセスは、作動に先立っては決まっておらず、刻一刻のシステムの作動から事後的にそれと定まるのである。システムが作動したということから遡って構成素や産出プロセスが定まる。しかしまた、それらによってシステムはそのように作動し、そのように存在したのだ。これは、2で見た事後性と遡行、時間を巻き込んだ循環と同様のものである。われわれはこのように、それがなぜ生じているのかの原理を、システムの「作動による存在」に見ることができる。

この事後性や遡行は、個々の構成素や部分的な産出プロセスについて生じるだけではない。オートポイエーシス・システムという個体そのものについて、同様のことが言えるのである。作動しつづけることによって存在し、作動を通じて新しい姿に変化する個体がオートポイエーシス・システムであり、その存在や姿は、その後の作動がつづくことによつてのみ、遡行的にそれと定まる。われわれはオートポイエーシス理論によって、中動態で語られる出来事となりたつしくみを、理解できるように思われる。

5. 作者であることのオートポイエーシス

われわれは、これまで中動態で捉えてきた制作過程を、「作者であることのオートポイ

エーシス」という視点で考察していくことができるだろう。作者はあらかじめ作者であるのではなく、制作という産出プロセスの作動を通じて作者であり、作者になりつづけていく。作品はシステムの構成素(のひとつ)であろう。ただし作品も最初から作品であるのではない。制作という産出プロセスがつづくことによって産出された(=制作された)事物が作品となる。作品という構成素が制作という産出プロセスを作動させ、その制作から産出されたものが、作品として次の制作を作動させ…そのような循環がつづくことによって、作者は作者になりつづけ、なりつづけることによって作者である。作者は、このように循環的に作動をつづけるオートポイエーシス・システムと、考えることができるのではないか。

作品制作とは、身体を備えた作者が何らかの素材を用いて見たり聞いたり触れたりできる客観的事物をつくり出すことである。頭の中にしかないものは作品ではない。意識や精神のはたらきだけでできる作品などない。したがって制作はなによりも行為として捉えなければならない。だからこそわれわれは、これまで、制作という行為との関係で、作者(および作品)の成立を理解しようとしてきた²⁷⁾。作者自身から見れば、具体的に作品をつくること(作品ができること)から、事後的に作者になっていた。中動態を理論モデルにし、技術論やハビトゥス論を足掛かりに考察すると、作者は、制作という行為を通じてみずから変容し、その都度作者に生まれ直してくるように思われた。その事態は、オートポイエーシス理論をモデルに捉え直すことができる。それは、オートポイエーシスが、河本英夫の言うように、「行為-存在論」として理解可能だからである²⁸⁾。

しかし、そもそものオートポイエーシス論からすれば、作者だけではなく個々の人間一般が、オートポイエーシス・システムであるはずだ。行為によって自己として存在するのは、作者だけではない。誰であっても、行為を通じて変容し、その都度自己になり直すのである。とすれば、芸術という領域のオートポイエーシスの特徴づけるのは何なのか。

そのためには、芸術を芸術として成立させている、より広い文脈を視野に入れなければならない。作者というひとつのオートポイエーシス・システムだけでなく、作者を取り巻く他のシステム、すなわち他者や社会というシステムも関わってくるからである。他の個人や社会はそれぞれに、それ自身オートポイエーシス・システムであるが、作者という1個のオートポイエーシス・システムにとっては環境である。したがってシステム相互の関係は浸透とみなされる。オートポイエーシス論は、このようなオートポイエーシス・システム相互の関係をより詳しく論じる²⁹⁾が、ここではその点を一旦脇に置き、(曖昧な言い方だが)広い文脈で一般に芸術の特徴のひとつとみなされる創発という事態を、オートポイエーシスから考えていきたい。

一般に芸術は、制作にしろ、受容にしろ、日常とは異なった体験をひとに生じさせるものとみなされている。すなわち芸術体験を通じて、ふだん生きている世界とは別の次元に手が届いたとか、今まで気づかなかった何かに気づいたとか、知らなかった何かに出会っ

たとか、これまで存在しなかった全く新しい何かが生まれたとか、それまでの自分とはどこか変わったとか、等々、ひとは感じる。一方「創発 emergence」とは、進化論、生命論、システム論などで使用される概念で、進化論からいえば、「それまでになかった新たな質が誕生する現象」³⁰⁾であり、システム論では「あるシステムにおいて、その部分の総和とは異なる性質、機能が、システム全体においてあらわれる現象」³¹⁾である。いずれにしろ、予見不能な何か、それをなりたさせる要素からは説明できないような何か、「おのずと出現してくる」³²⁾ことをさす。とすれば、芸術の特徴のひとつを、創発ということばで捉えることは可能だろう。われわれの日常生活においても、ときに創発は生じるはずだが、とはいえ新たなことがらが生じず平凡に同じことがらが繰り返されることも少なくないし、そうであっても別に問題はない。これに対して芸術は、創発をひとつの重要な特徴として(あるいは目的として?) 営まれる活動と考えられるのである。

河本英夫は「オートポイエーシスでは創発そのものがシステムの本性となる」³³⁾と指摘しているが、それは、オートポイエーシス・システムが産出プロセスの環状作動によってのみ、みずから作動を維持継続していくからである。産出物が構成素として次の産出プロセスを作動させるプロセスが環状に連鎖するという条件さえ満たせば、そのときどきの構成素や産出物プロセスはどのようなものであってもよい。逆からいえば、どのようなものにもなりうる。どのようなものになるのかは、システムの作動によってしか決まらないのであるから、いつなんどきでも予見不可能な新しい何かが生じるのである。このようにオートポイエーシス・システムは創発の可能性をあらかじめ本性として備えている。それゆえにオートポイエーシスは、創発をひとつの重要な特徴とする芸術を理解する際の理論モデルとなりうる。もちろんオートポイエーシス・システムに創発が生じない場合もあるだろう。オートポイエーシス・システムが構成素や産出プロセスの変化なしに同じ構造のまま循環をつづけているのであれば、変化しない主語をたて、能動受動のことばで現象を語ることになるだろう。われわれの日常生活にはそういう場面も多く、そう語ってもあまり問題は生じない。しかし創発という現象が問題になれば、それを語ることばは中動態を必要とし、そこではオートポイエーシスが顕かになる。芸術は、創発をひとつの特徴とするがゆえに、オートポイエーシスに気づきうる特権的な場所ということになるだろう。われわれは中動態を足がかりにして「作者であることのオートポイエーシス」を見いだしたが、そこにいたる考察は、「作者であるということは、どういうことか」という芸術の領域の問いであることによって、有利なかたちですすんだものと思われる。

おわりに

「作者であること」をオートポイエーシスとして捉えることによって、われわれにはどのような視界がひらかれるのだろうか。最後にその点を、おおよそのかたちで見ておきたい。

本論では、作者の作品をつくるという行為に焦点をあてて考察をすすめたが、さきにも述べたように、作者が作者であることには、他者や社会（歴史、文化）が大きく関わっている。社会や他者も、それ自身オートポイエーシス・システムとみなされている。したがって、作者と他者や社会との関係を、オートポイエーシス・システム同士の浸透というかたちで考察することができるだろう。その際、創発という現象がひとつのポイントとなるはずだ。すなわち芸術という領域において、創発は作者（というオートポイエーシス・システム）に生じるだけでなく、作品の受容者にも³⁴⁾、社会にも生じている。その創発には、作品が関わっているはずだ。作者、受容者、社会というオートポイエーシス・システムに、作品というひとつの客観的的事物が、なんらかのかたちで共通に組み込まれ、それらの相互浸透においてはたらいっているのではないか。

また本論では、作者をおおざっぱにひとつのオートポイエーシス・システムとして考察したが、オートポイエーシス論では、ひとりの人間に生命システムと心的システム（あるいは意識システム）の区別が行われたり³⁵⁾、認知行為システムと情動・感情のシステムとが語られたり³⁶⁾、自己システムを感覚、欲動、情動、言語という4つのシステムからなるものとする場合も見られる³⁷⁾。ここでも、それら複数のシステム相互の関係が問題となる。芸術の創発が生じるにあたって、それらはどのように浸透し合いどのように作動しているのか。

芸術において創発が価値とされるのであれば、ひとはそれを求めて行為していることになる。しかしその創発は外部からの操作で引き起こせるものではなく、ひとはそれに巻き込まれてみずから変化することによってしかそれを体験できない。制作であれ受容であれ、それを求める意識的行為が芸術の名の下に行われているわけだが、その際、いったい何をどうすれば創発が起こることになるのだろうか。意識的に何をどうすることが、オートポイエーシス・システムが創発に向かって作動することにつながるのだろうか。われわれに何ができるのだろうか。そもそも芸術の領域でひとは何をしてきたのだろうか。システム相互の浸透関係も視野に入れ、オートポイエーシス論からそれを考えていきたい。

註

- 1) BARTHES, Roland (1968) 《La mort de l'auteur》, (*Oeuvre complètes TOME II*, Seuil, 1994 花輪光沢「作者の死」【物語の構造分析】みすず書房 1979所収)
- 2) たとえば佐々木健一 (1985) 【作品の哲学】東京大学出版会
- 3) 森田亜紀 (1999) 「中動態の射程」倉敷芸術科学大学紀要第4号、同 (2003) 「芸術体験の中動相」美學第214号 (美學会)、同 (2004) 「制作過程の中動相—技術とくかたち>をめぐる考察—」倉敷芸術科学大学紀要第9号
- 4) BENVENIST, Emile (1950) 《Actif et moyen dans le verbe》, (*Problèmes de Linguistique Générale*, Paris, Gallimard, 1966, 岸本通夫監訳「一般言語学の諸問題」みすず書房 1983所収), GONDA, Jan (1960) 《Reflections on the Indo-European Medium I》, *Lingua*9, 1960, KLAIMAN, M. H. (1988) 《Affectedness and control: a typology of voice systems》 (Masayosi SHIBATANI ed., *Passive and*

- Voice, John Benjamins publishing Co. 1988, KEMMER, Suzanne (1993) *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Co.
- 5) 森田亜紀 (2004) 「制作過程の中動相—技術とくかたち>をめぐる考察—」、同 (2005) 「技術における創造性—行為と素材のあいだから—」倉敷芸術科学大学紀要第10号
 - 6) 三木清 (1941) 「技術哲学」三木清全集第7巻 岩波書店 1967 所収、CASSIRER, Ernst (1930) *Form und Technik, Symbol, Technik, Sprache*, Felix Meiner Verlag, 1995所収 (篠木・高野訳「シンボル・技術・言語」法政大学出版局 1999)
 - 7) 森田亜紀 (2007) 「作者であることの事後性をめぐって」倉敷芸術科学大学紀要12号
 - 8) ALAIN (1926) *Système des Beaux-Arts*, Gallimard (『芸術論集』桑原武夫訳 世界の名著66 中央公論社 所収)、COLLINGWOOD, R.G. (1957) *The Principles of Art*, the Clarendon Press, 1938 / Oxford University Press (『芸術の原理』近藤重明訳 勁草書房 1973、『藝術の原理』山崎正和訳 世界の名著 81 中央公論社 1979所収)、山崎正和 (1983) 「演技する精神」中公文庫 1988 など
 - 9) MERLEAU=PONTY, Maurice (1945) *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard (竹内芳郎ほか訳『知覚の現象学1, 2』1-1967, 2-1974 みすず書房)、同 (1948) *Sens et non-sens*, Paris, Gallimard (滝浦静雄ほか訳『意味と無意味』みすず書房 1983)
 - 10) ALAIN(1926)*Système des Beaux-Arts*, COLLINGWOOD.(1957) *The Principles of Art*, 山崎正和(1983)『演技する精神』
 - 11) MERLEAU=PONTY, Maurice (1964) *Le Visible et l'Invisible*, Paris, Gallimard (『見えるものと見えないもの』滝浦静雄・木田元訳 みすず書房 1989、『見えるものと見えざるもの』中島盛夫監訳 法政大学出版局 1994) p.243
 - 12) BERGSON, Henri (1934) *La pensée et le mouvant*, (Oeuvres, PUF, 1959所収) (『思想と動くもの』矢内原伊作訳 ベルグソン全集6 白水社 1965)
 - 13) MERLEAU=PONTY, Maurice (1953) *Éloge de la philosophie*, Paris, Gallimard (『哲学をたたえて』滝浦静雄・木田元訳『眼と精神』みすず書房 1966所収)
 - 14) 森田亜紀 (2008) 「表現と時間 —あるいは「真なるもの」の遡行運動」をめぐる」倉敷芸術科学大学紀要第13号
 - 15) 『岩波 哲学・思想事典』(1998) 大澤真幸「システム」の項 岩波書店
 - 16) 「生きているシステムとは外部の物質もしくはエネルギーをその内部プロセスによって自己維持と自身自身の部品の生産のために用いることのできるシステムである。」LUISSI, Pier Luigi (2006) 白川智弘+郡司ベギオ-幸夫訳『創発する生命』NTT出版 (2009) p.35
 - 17) MATURANA, Hubert R. and VARELA, Francisco J. (1980) *Autopoiesis and Cognition, The Realization of the Living*, D. Reidel Publishing Co. (河本英夫訳『オートポイエーシス生命システムとはなにか』国文社1991)
 - 18) 山下和也 (2010) 『オートポイエーシス論入門』ミネルヴァ書房 p.18
 - 19) 中動態で表されるような出来事を、日本思想の領域では「おのずから」という概念で把握しようとする流れが存在する。しかしその場合、自己(みずから)が非対称的に「こちら側」に生じてくることが理解できない。森田亜紀 (2011) 「『おのずから』と中動態、そしてオートポイエーシス」倉敷芸術科学大学紀要第16号
 - 20) 例えば昆虫が変態しても同じ個体であるように。河本英夫 (1995) 『オートポイエーシス 第三世代システム』青土社 p.219.同 (2006) 『システム現象学 オートポイエーシスの第四領域』青土社 p.355、山下和也 (2010) 『オートポイエーシス論入門』p.48
 - 21) MATURANA and VARELA (1980) *Autopoiesis and Cognition, The Realization of the Living* p.80~81
 - 22) MATURANA and VARELA 同上 p.80 ただしここでは、allopoieticと形容詞である。
 - 23) LUHMANN, Niklas (1984) 佐藤勉監訳『社会システム論(上)』恒星社 (1993) p.335、河本 (1995) 『オー

- トポイエーシス 第三世代システム』 p.216、山下和也 (2010)『オートポイエーシス論入門』 p.32
- 24) 山下和也 同上 p.35
 - 25) MATURANA and VARELA (1980) *Autopoiesis and Cognition, The Realization of the Living* p.101
 - 26) 河本英夫 (2000)『オートポイエーシスの拡張』青土社 p.16
 - 27) 森田亜紀 (2006)「拘束からの生成—いかにして「作者」になるのか?—」倉敷芸術科学大学紀要第11号、同 (2010)「制作過程におけるくかたち」の成立」倉敷芸術科学大学紀要第14号
 - 28) 河本英夫 (1995)『オートポイエーシス 第三世代システム』 p.195
 - 29) オートポイエーシス・システム相互の「構造的カップリング」。MATURANA and VARELA (1980) *Autopoiesis and Cognition, The Realization of the Living* p.107～、河本英夫 (1995)『オートポイエーシス第三世代システム』 p.247～、山下和也 (2010)『オートポイエーシス論入門』 p.66～
 - 30) 『岩波 哲学・思想事典』 p.524r
 - 31) LUISI (2006) 白川智弘+郡司ベギオ-幸夫訳『創発する生命』訳注 p.332
 - 32) 河本英夫 (2010)『臨床するオートポイエーシス』 p.111
 - 33) 河本英夫 (2002)『メタモルフォーゼ オートポイエーシスの核心』 p.9
 - 34) われわれは作品の受容体験にも中動態を見たが、それをオートポイエーシスというかたちで理解することは可能であろう。森田亜紀 (2001)「表情知覚の中動相」平成19-12年度科学研究費補助金〔基盤研究 (A) (1)〕研究成果報告書『「感性の学」の新たな可能性—その意義と限界』、同 (2003)「芸術体験の中動相」
 - 35) LUHMANN (1984) 佐藤勉監訳『社会システム論 (上)』、山下和也 (2010)『オートポイエーシス論入門』
 - 36) 河本英夫 (2006)『システム現象学 オートポイエーシスの第四領域』
 - 37) 十川幸司 (2008)『来るべき精神分析のプログラム』講談社選書メチエ p.29～30

Autopoiesis of Being an Author

Aki MORITA

Collage of the Arts,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2011)

Even after <the death of the Author> proclaimed by Roland Barthes, many people keep producing their works to call themselves authors. Of course they are not to be Authors who exercise authority over their own works. Then how are they <authors>?

It seems that they become authors through their process of production. That is the process described not in active but in middle voice. Middle voice process arises of itself and something is slipping off from itself. But what is such <itself>?

The theory of autopoiesis proposed by Maturana & Varela shows us what the <itself> of the middle voice process is. The autopoietic system is organized as a circular network of processes of production that produces its components. And its components make its process operate. Accordingly the autopoietic system continues its operation to be <itself>. So the autopoietic theory can be considered as a theory of individualization. It keeps itself with itself transforming.

We can consider an actual author as an autopoietic system. He or she continues to produce his or her works to keep becoming an author.